

図工・美術教員の研修の現状(1)
——釧路管内の教員を対象としたアンケート調査から——

新 井 義 史・佐々木 幸

北海道教育大学紀要（第1部C）

第45巻 第2号 別刷

平成 7 年 3 月

図工・美術教員の研修の現状(1) ——釧路管内の教員を対象としたアンケート調査から——

新井 義史・佐々木 幸

はじめに

現在の図画工作科・美術科教育は、学校教育に関わる様々な問題と、造形教育そのものの質的な問題の双方を抱えている。実際の指導にあたる教師は、こうした問題に加えて、自分自身が教師としてどうあるべきかという立場や態度、ひいては自分の生き方を、日々の教育活動の中で模索している現状にあるといえる。それは、教材研究を含む研修の問題と深く関わるものでもある。

ところで、現在、釧路地域における北海道立の芸術・文化施設として、「釧路芸術館（仮称）」設立構想が具体化されている。¹⁾これは、従来の美術館的機能に加え、「指導者育成機能」を重視するものとしての方針が打ち出されているが、具体案としては明確化されていない。

本研究は、釧路管内の図工・美術担当教員の研修に関わる実態を把握するとともに、このような指導者育成・支援機関の機能を実地的な見地から提言していくための基礎的な資料を得ることと、今後の美術教育の展開を実践的側面から考察していくことを目的として行ったものである。

1. 調査の概要

(1)調査の目的

釧路管内の図工・美術科担当教員の学校に置かれている立場、教材研究や研修の実践状況と抱える問題点、指導者の支援機関に期待する内容などを含めた教員の実態を明らかにする。

(2)調査の内容

調査内容を設定するにあたっての事前調査として、釧路管内の7名の現職小学校教諭、中学校教諭から、日々の指導の状況や教材研究、悩みなどの聞き取り調査をした。その結果をもとに、調査内容を次のように設定した。（資料－1 調査内容参照）

調査内容Ⅰ 教員と学校について（年齢・経験年数・現在校勤務年数、担当学年と時間数、美術の専攻経験の有無、美術免許の有無と免許外担当教科、関連購読誌）

調査内容Ⅱ 図工・美術の教材研究と研修について（各教材研究の内容についての関心と実践状況、指導上の悩みや問題と解決の状況）

調査内容Ⅲ 指導者の支援機関について（所属する研修会や研修機関、美術鑑賞の機会、期待する指導者育成機関の機能と利用方法）

これらの調査内容は、質的な違いによる二つの側面をもつ。1つは、教師の置かれている状況について客観的事実として回答を求めるものである。（調査内容Ⅰ、調査内容Ⅲのうち所属する研修会や研修機関、美術鑑賞の機会）。もう1つは、設定された質問項目に対する関心、共感、期待の度合いなどについて、教

師の主観的な意識にもとづいて回答を求めるものである（調査内容Ⅱ，調査内容Ⅲのうち期待する指導者育成機関の機能と利用方法）。すなわち，教師の実態を，客観的事実調査と教師の意識調査の双方から据えようとした。

(3)調査の方法

①回答方法 無記名による質問紙法による。

②調査対象 釧路管内の小・中学校95校の教員95名（1校につき1名）。小学校では，校長が適任者を選定するように依頼し，中学校では美術担当教諭に依頼した。対象校は，小学校51校（釧路市内の全小学校27校，市外9町村の小学校24校），中学校37校（釧路市内の全中学校13校，市外9町村24校），釧路管内の小・中併置校7校とした。

③調査期間 平成6年7月8日から15日まで。

④回収状況 回収数は，小学校27，中学校21の計48校で，回収率は50.5%であった。

2. 調査結果と分析

調査の結果は，資料-2として示した。分析を行う調査内容は，教師の意識調査として設定した内容について行い，客観的事実調査の結果は分析を確認する基礎資料として扱った。したがって，ここで分析を行う調査内容は，(1)調査内容Ⅱ：図工・美術の教材研究と研修について（Ⅱ-1教材研究の関心と実践），(2)調査内容Ⅱ：図工・美術の教材研究と研修について（Ⅱ-2指導上，研修上の悩みや問題点），(3)調査内容Ⅲ：指導者の支援機関について，（Ⅲ-3指導者育成機関の機能）の3つである。これらは，それぞれの内容として考えられる事項を20項目設定し，それに対する教師の意識の度合いを調べる方法を用いている。それぞれの20の項目は，理念的内容，授業即応的内容，情報・図書・資料，教養的内容の4つの類型に分類される。分析を行う上では，それぞれの20項目の調査用紙上での記載順を無視し，類別順に記載し直してグラフを作成している。

(1)調査内容Ⅱ：図工・美術の教材研究や研修について（教材研究の関心と実践についての分析）

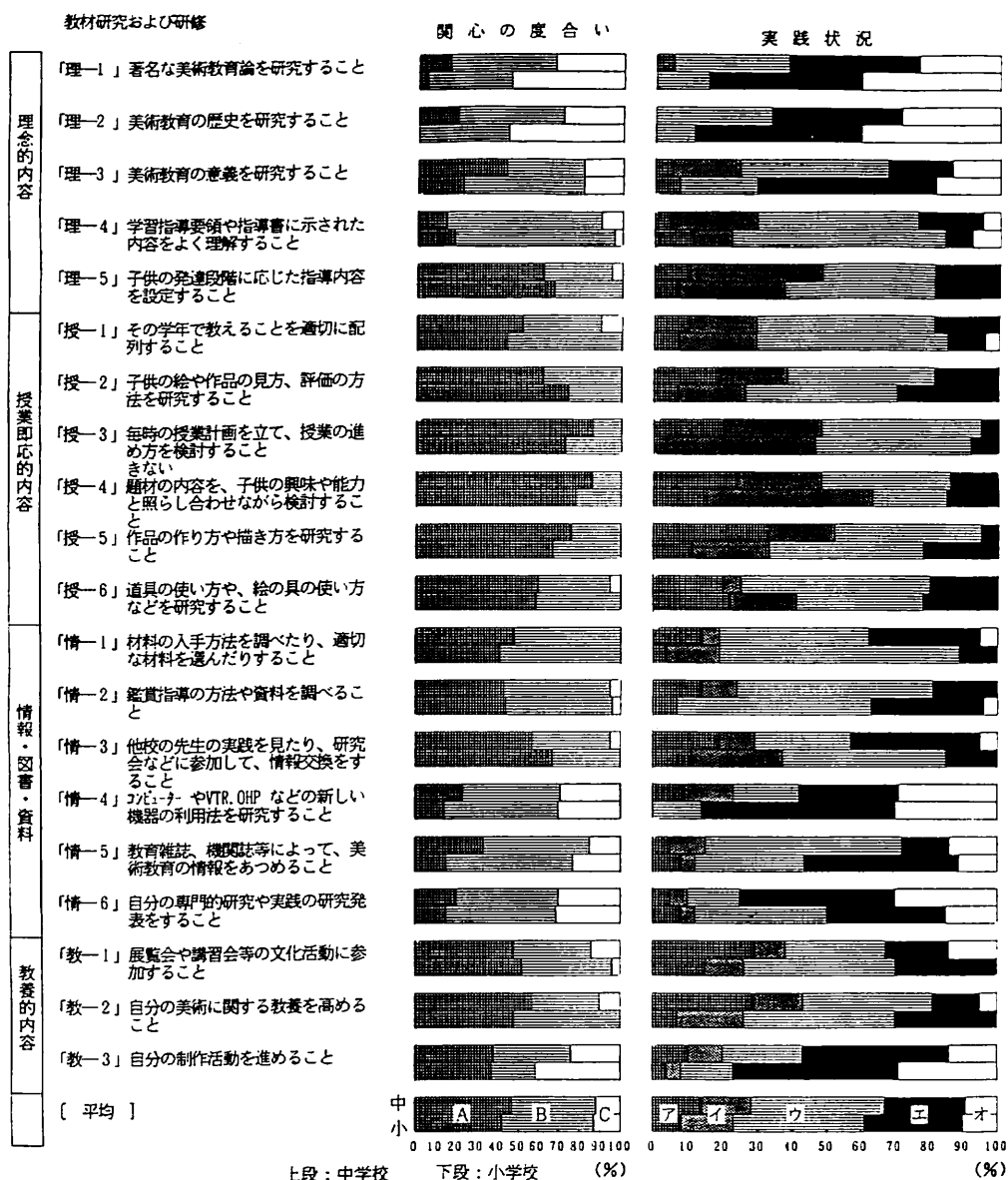
図工・美術の担当教員としての教材研究や研修は，様々な内容が考えられる。これらの言葉の解釈の幅は広く，教育現場においてはある程度の共通認識がなされているといえども，実際には教師個人の教育観に委ねられており，効果的な教育活動のために学校の実態や必要において取捨選択して教材研究や研修がなされている。ここでは教師の関心が高い，あるいは低い教材研究や研修の内容やその実践の状況を把握するための調査を行った。

調査は，教材研究や研修として考えられる内容を20項目設定し，それぞれについての「関心の度合い」をA：関心が高い，必要を感じる，B：あまり意識しないが関心はある，C：関心はない，特に必要性を感じない，の3段階での回答を求めた。同時に，20項目についての「実践状況」を，ア：積極的に平素から行っている，イ：年間を通して定期的に行っている，ウ：不定期だが必要に応じて行っている，エ：諸々の事情によってできない，行っていない，オ：必要性を感じないので行っていない，の5段階での回答を求めた。

①全体的な傾向

20項目を通してのA，B，C，それぞれの回答数の合計の比率（Aの計：Bの計：Cの計）は，小学校では42%：45%：13%，中学校では47%：41%：12%となった。小学校，中学校ともに概ね関心が高いといえる。

図工・美術教員の研修の現状(1)



グラフー1 教材研究の関心と実践

・ Aの回答の傾向 (積極的な関心の高さ)

Aの回答率が高い、すなわち関心の高い内容は、授業即応的内容の類別項目に集中している。このことから、教材研究や研修の中心を毎時の授業に位置づけ、そこから研究や研修の内容を拡大していこうとする教師の姿勢が想定できる。

他の類別の中で、Aの高さが特徴的な内容は、「理-5：こどもの発達段階に応じた指導内容を設定すること (小：67%、中：62%)」、「情-3：他校の先生の実践を見たり、研究会などに参加して、情報交換をすること (小：67%、中：57%)」、「教-1：展覧会や講習会などの文化活動に参加すること (小：52%)」、「教-2：自分の美術に対する教養を高めること (中：57%)」などが挙げられる。

反対にAの回答率の低さ、すなわち積極的関心の低さが特徴的なものは、ほとんどの理念的な内容(理-5を除く)と情報的内容のうち、情-4、5、6に集中する。特に、「理-2：美術教育の歴史を研究すること」は、小学校ではAの回答は皆無である。これらは、授業との直接的な関連が顕在化されにくい内容であると同時に、児童生徒との接触をもたず、教師個人が新しい研究の契機を必要とするためと考えられる。

・ Bの回答の傾向 (消極的な関心の度合い)

Bの回答率は、内容に対して肯定的な要素を持つものの、Aに比べ、消極的な意味合いが強く、ほとんどの項目に対して比較的高い比率で分布している。ただし、授業即応的内容の項目は、Aの回答率が極めて高いので、Bの回答率は比較的小さい。Bの最高値は「理-4：学習指導要領や指導書に示された内容をよく理解すること（小：78%、中：76%）」である。Bの高い回答率は、Aの回答率の低い項目に多く見られる。

・Cの回答の傾向（関心の低さ、否定的要素）

Cの回答率は、Aの回答率の低さと共に、関心の低さや否定的傾向を表す。Cの特徴的な分布は、理念的内容、情報・図書・資料の類別に認められる。特にAの回答率の低い項目で、Cの回答率の高さが目立つ。

「理-1：著名な美術教育論を研究すること（小：55%、中33%）」、「理-2：美術教育の歴史を研究すること（小：56%、中：29%）」、「情-4：コンピュータやVTR、OHPなどの新しい機器の利用法を研究すること（小：30%、中：29%）」、「情-6：自分の専門的研究や実践の研究発表をすること（小：31%、中：30%）」などがその例である。教養的内容の類別では、「教-3：自分の制作活動を進めること（小：41%、中：24%）」がある。

②小・中学校の関心の相違

全体を通しては、小学校と中学校との際立った相違は認められない。傾向としては小学校、中学校ともほぼ同じであるといえるが、「理-1：著名な美術教育論を研究すること」では、小学校の方がAの回答率が低く、Cの回答率が高いため、関心が低いといえる。「理-2：美術教育の歴史を研究すること」も同様のことがいえる。「教-3：自分の制作活動を進めること」では、小学校におけるAとCの回答率がほぼ同数で（A：37%、C：41%）、Bが22%と低く、中学校でのA、B、Cの傾向（A：38%、B38%、C24%）と異なる。これは、自分の制作に対して、小学校教諭の方が態度で明確であることを示すと考えられる。

③実践状況の傾向

アとイの回答率は、内容に対しての積極的な実践の傾向を示すものとして考えられる。ウの回答は、消極的要素を残すものの、実践がなされていると判断できる。エは実践に対する障害の存在を示している。オは実践の必要性を感じない、否定的要素である。

ア、イ、ウ、エ、オそれぞれの回答数の合計の比率（アの計：イの計：ウの計：エの計：オの計）は、小学校では8%：15%：38%：29%：10%であり、中学校では、14%：14%：39%：24%：9%である。小学校中学校ともにア、イ、ウを加算した回答率は60%を越え、比較的实践がなされていると判断できる。しかし、エの回答率は予想以上に高く、注目される。

内容毎の実践の傾向は、関心の度合いとはほぼ同じ傾向を示している。すなわち、関心の度合いが高いものは、よく実践もなされている。反対に関心が低く、否定的な傾向を示すものは、実践においても否定的な要素を残す。したがって、授業即応的内容の類別項目にア、イ、ウの回答率の高さが認められる。

エの回答は、理念的内容、情報・図書・資料、教養的内容の3つの類別にわたって、比較的高い数値で分布している。とくに注目されるのは、「理-1：著名な美術教育論を研究すること（小：44%、中：38%）」、「理-2：美術教育の歴史を研究すること（小：48%、中：38%）」、「理-3：美術教育の意義を研究すること（小：52%）」、「情-4：コンピュータやVTR、OHPなどの新しい機器の利用方法を研究すること（小：56%）」、「情-5：教育雑誌、機関誌等によって、美術教育の情報を集めること（小：46%）」、「情-6：自分の専門的研究や実践の研究発表をすること（小：35%、中：45%）」、「教-3：自分の制作活動を進めること（小：48%、中：43%）」などである。エの回答率の高さは、中学校よりも小学校において顕著であり、前述のうち、理-3の回答率は小学校は52%であるが、中学校では19%にしかすぎない。同様の差は、情-

4で小学校が56%に対し中学校が29%、情-5では小学校が46%に対し中学校が14%、などに認められる。教材研究や研修の障害となる事情が何であるかということについては、この調査の対象とはしていないため、断定することはできないが、日々の校務の煩雑さやそれに伴う研究、研修時間の不足などが予想される。さらに、理念的内容にエの回答数の高さが目立つことから、美術教育の理念に関する研究が教育現場において漠然と必要なものとして認識されてはいるものの、具体的な研究の方法については浸透していない現状にあると予想される。

(2)調査内容Ⅱ：図工・美術の教材研究と研修について（指導上、研究上の悩みや問題点）の分析

図工・美術の担当教員は、指導上、研究・研修上の様々な問題点や悩みを持っていると考えられる。それらは教師個人の力量で解決が可能なものもあるだろうが、学校教育全般に関わる問題や、学校教育における美術教育のあり方などの美術教育の理念に関わる問題、さらには学校の置かれている地域的な問題や教師の労働条件に起因する問題などのように、教師個人の能力を越えた次元の問題も想定される。種々の問題を明確にするとともに、教師の解決に向けての対応を明らかにすることは、学校や様々な教育関係機関、あるいは社会が、どのように支援しているかということをも示唆するであろう。

調査は、指導上の悩みや問題点として考えられる内容を20項目設定し、それぞれについて「共感の度合い」をA：共感できる、同じ状況である、B：時々そう思うこともある、C：共感しない、そうは思わない、の3段階での回答を求めた。同時に、20項目についての「解決の状況」を、ア：既に解決済みである、イ：自分で解決できる、自力で解決しようとしている、ウ：何らかの支援があれば解決できる、支援を必要としている、エ：現段階では解決を保留している、解決できそうにない、オ：特に解決の必要を感じない、の5段階での回答を求めた。

①全体的な傾向

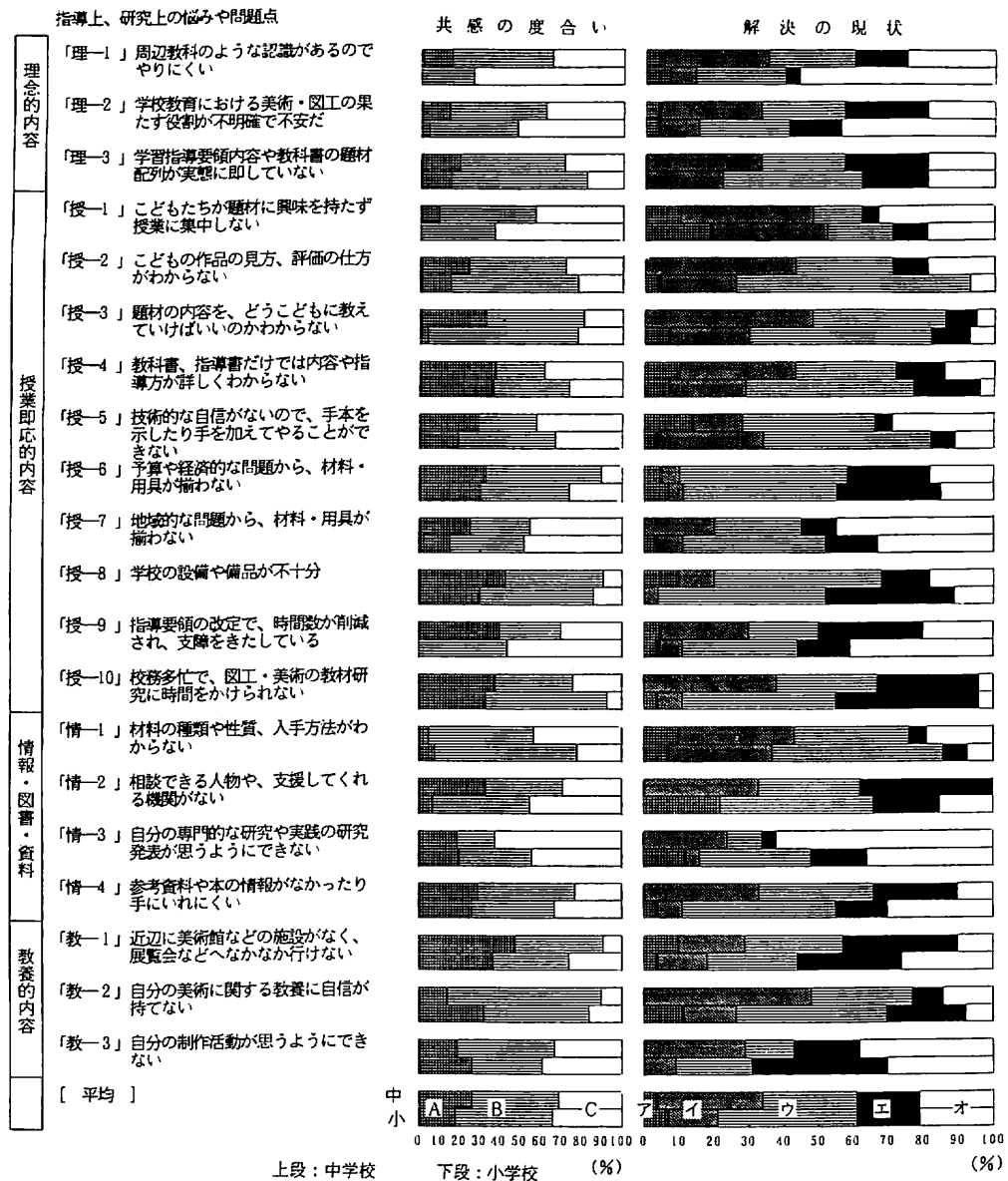
20項目を通してのA、B、Cそれぞれの回答数の合計の比率（Aの計：Bの計：Cの計）は、中学校では26%：43%：31%、小学校では18%：48%：34%となった。小学校中学校ともにBの回答率が約半数を占め、次いでC、Aとなる傾向にある。予想よりもAの回答率が低く、Cの回答率が高いことから、漠然とした悩みは感じているものの、切実な悩みや問題は生じていない傾向があるといえる。

・Aの回答の傾向（切実な悩みを示す）

Aの回答率は高いとはいえ、50%を越すものはない。その中でも高い回答率を示すものは次のような内容である。「教-1：近辺に美術館などの施設がなく、展覧会などへなかなかいけない（小：37%、中：48%）」、「授-8：学校の設備や備品が不十分（小：30%、中：43%）」、「授-4：教科書、指導書だけでは内容や指導方法が詳しくわからない（小：37%、中：38%）」、「授-9：指導要領の改訂で、時間数が削減され、支障をきたしている（中：40%）」、「授-10：校務多忙で、図工・美術の教材研究に時間をかけられない（小：33%、中：38%）」。美術館等の施設がないことは、釧路管内の地域的な問題である。学校の設備や教科書等の不備を指摘する傾向は、教師が現実的な授業実践について問題意識を強く持っていることを示している。校務多忙という点については、教師の労働条件の実態がうかがえる。類別によるAの回答率の差異は、理念的内容の類別においてわずかに回答率の低さを示すが、その他は際立った差異は認められない。

・Bの回答の傾向（悩みや問題点に対する漠然とした共感）

Bの回答率は、全体を通して最も高い。これは、内容に対して切実な問題として認識するというよりも、漠然とした共感を示すものと考えられる。Bの回答はほぼ類別に関係なく、高い数値で分布している。最も回答率の高い内容は、「教-2：自分の美術に対する教養に自信が持てない（小：52%、中：76%）」であり、



グラフ-2 指導上、研究上の悩みや問題点

次いで「授-3：題材の内容を、どう子供に教えていけばいいのかわからない (小：74%)」などがある。これらのことから、日々の授業を行う上では切実な問題として認識されるわけではないが、指導者としてこれでいいのだろうかというような漠然とした不安感を抱く教師の姿を想定できるのではないか。

・Cの回答の傾向 (悩みに対して否定的な要素)

Cの回答は、示された内容に対して問題意識を感じないという教師の意識の他に、既に問題を解決してしまっている場合、問題や悩みを生じさせない恵まれた環境下に置かれている場合などが考えられる。Cの回答率が高い内容は、「理-1：周辺教科のような認識があるのでやりにくい (小：74%)」、「授-1：子供たちが題材に興味を持たず授業に集中しない (小：63%)」、「情-3：自分の専門的な研究や実践の研究発表が思うようにできない (中：62%)」などである。その他の内容についても、概ねAよりも高い回答率で全体的に分布している。

②小・中学校の共感の相違

全体を通しては、小学校よりも中学校の方が、悩みや問題点を多く抱えている傾向にある。特徴的な相違

は次のような内容に表われている。「理－1：周辺教科のような認識があるのでやりにくい」では、中学校のAの回答率が15%であるのに対し小学校では皆無、中学校のCの回答率が35%であるのに対して小学校では74%である。これは、中学校の方が教科としての専門性が増し、さらに高校受験を意識した教科観から美術の周辺教科としての意識が増すことが考えられる。また、「授－1：子供たちが題材に興味を持たず授業に集中しない」でも、AとCの回答について同じような比率の傾向がある。これも、中学校の方が専門性が増し、生徒の成長に伴って高まる表現の質的な欲求に実際の表現力が追い付かないために、いわゆる「美術嫌い」として表われる傾向と考えられる。「情－2：相談できる人物や、支援してくれる機関がない」についても、中学校の方が、小学校よりも強く共感を示している。ほとんどの中学校では、ひとつの学校に配属される美術教師が1名のみという現状によるものと考えられる。

反対に、中学校よりも小学校で強く表われている悩みや問題点は、「情－1：材料の種類や性質、入手方法がわからない」、「情－3：自分の専門的な研究や発表が思うようにできない」、などがA、Bともに小学校の方が高い回答数である。また、「教－2：自分の美術に対する教養に自信が持てない」、「教－3：自分の制作活動が思うようにできない」などは、Aの回答率が小学校に高く表われている。

③解決の現状の傾向

ここでの回答は、解決の事実の有無の他に、教師の解決へ向けての態度としても解釈できる。アの回答率は問題を既に解決した望ましい状態を表わし、イの回答率は解決に向けての教師の自主的積極的な態度を示す。ウは自己の能力を超えた問題であり、支援の要求度を示している。エは、解決を保留する消極的な態度、オは問題意識を持ちえない否定的な態度、または問題そのものが存在していない事実を示している。

ア、イ、ウ、エ、オのそれぞれの回答数の合計の比率（アの計：イの計：ウの計：エの計：オの計）は、小学校では7%：12%：40%：18%：21%、中学校では4%：30%：27%：18%：21%である。小学校ではウが最も高く、支援の要望度が高いが、中学校ではイが最も高く、自力で解決しようとする場合が多いといえる。しかし、両者ともにオが全体の約2割をしめ、教師の意識している問題や悩みが予想よりも少ないことがわかった。

アの回答は、低い回答率でほぼ全体に分布している。イの回答は、中学校において比較的高い回答率で表われ、教師個人で対応できる内容について分布しているが、学校の制度や設備上の問題や経済的な問題、地域的な問題に起因する内容については、当然自力で解決できるものではないので低い回答率となる。ウの回答は、全体にわたって比較的高い回答率で分布しており、特に小学校において顕著である。中学校では自力での解決を指向している内容について、小学校では支援を求めている傾向にある。概して小学校の方が、依存度が高いといえるが、小学校教員が全教科を担当しなければならない立場にあること、中学校教員は美術の専門教員の立場であることの違いによるものであると考えられる。

エの回答も、教師個人の能力を超えた次元の問題について高い回答率を示している。オの回答率は予想以上に高く、「情－3：自分の専門的研究や発表が思うようにできない」では、中学校で62%を示している。また、「理－1：周辺教科のような認識があるのでやりにくい」では、小学校で63%を示している。前者は、教師が問題意識を持ちえないことを表していると考えられるが、後者は問題そのものが存在しにくいことを表わしていると考えられる。ほかにも、比較的高い回答率が表われている内容もあるが、いずれにせよ、様々な問題に対する教師の意識構造を機会を別にして調査する必要性がある。

(3)調査内容Ⅲ：指導者の支援機関について（指導者育成機関の機能）の分析

ここでの指導者育成機関とは、北海道立の公的機関として平成10年度に設立が予定されている「釧路芸術

館（仮称）」を指すものである。調査の実施の時点では、この芸術館構想は、大枠として「指導者育成機能」を重視する方針案が打ち出されているが、そのための具体的な事業内容及び施設計画は、まだ明確には決定されていない。また、釧路管内の図工・美術に関係する教員であっても、その多くは構想概要すら知りえていない状況にある。したがって、ここでの調査は、新設される「指導者育成機関」を白紙の状態と考え、それに対する個々の教員の要望を明らかにすることを目的としている。

調査は、指導者育成機関として考えられる内容を20項目設定し、そのうち特に期待する項目を5つ選択し、同時に選択した項目についての利用条件を、ア：夏・冬休みの時期に集中して利用できる、イ：放課後、退勤後に利用できる、ウ：土曜、日曜に利用できる、エ：学期中に外勤・出張の形で利用できる、オ：時間に制約がなく、希望によって即時利用できる、の5段階の回答を求めた。

①全体的な傾向

- 要望度が高い内容(回答率が51%を越すもの)を挙げると次の3項目である。

授-2：子どもの興味や意欲を喚起する題材例などの紹介の講習会（中：53%、小：58%）

授-4：様々な技術技法の体験的講習会（中：53%、小：68%）

授-3：子どもの絵や作品の見方や評価についての講習会（中：58%、小：68%）

いずれも授業即応的な内容に集中している。

- 要望度がやや高い内容（回答率が30～50%のもの）

理-3：子どもの特性や発達についての講演、講習会（中：12%、小：32%）

授-5：様々な素材の種類や性質、教材化などの実践的講習会（中：22%、小：54%）

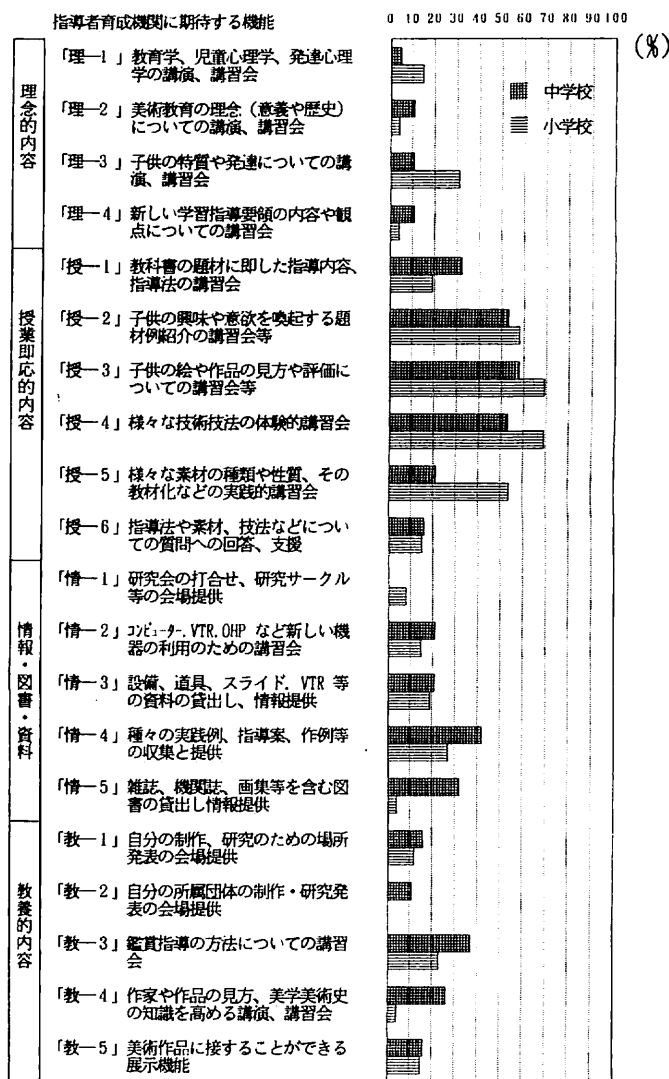
授-1：教科書の題材に即した指導内容、指導法の講習会（中：33%、小：18%）

情-4：実践例、指導案、作例等の収集と提供（中：43%、小27%）

教-3：鑑賞指導の方法についての講習会（中：37%、小：23%）

やや高い要望度は、各類型にそれぞれ1～2項目あることがわかる。

多少の差はあるものの、要望は、20項目のいずれにも広範に分散しており、皆無である項目はない。しかし、類別では、授業即応的な内容に要望が集中している。したがって、全体的な傾向としては、要望度が「高い」、「やや高い」項目は、そのすべてが日常の授業実践と緊密に関係しており、それ以外の理念的内容、情報・図書・資料、教養的内容に関しての要望は、いたって「低い」と言えるだろう。



グラフ-3 指導者育成機関に期待する機能

②小学校、中学校との要望の相違

・小学校と中学校を比較して、要望度に大きな相違（25%以上の差）がある内容は、以下の4項目である。

授-5：様々な素材の種類や性質、その教材化などの実践的講習会

理-3：子どもの特性や発達についての講演、講習会

教-4：作家や作品の見方、美学や美術史の知識を高める講演や講習会

情-5：雑誌、機関誌、画集を含む図書の貸し出し、情報提供

小学校教諭の要望度が高い授-5は、授業で使用する素材や技法の多様性に起因し、理-3は6年間での子どもの発達が極めて大きなことによるのであろう。中学校教諭の割合の方が高い教-4、情-5は、ともに専門性に基づく「一般的な美術」理解のための情報提供への要望と受け止めることができ、小学校教諭に比較して「教養的」関心は、やや高いと言えよう。

③利用の条件について

この質問内容は、選択した5項目の「期待する機能」に関して、利用しやすい、あるいは利用したい条件をアからオの中から選択するものである。調査票作成の時点では、選択した項目の内容により利用条件が異なることを予想していた。しかし、結果を見ると、5項目すべてにはほぼ同一の回答をした者が59%いた。このことは、講習会の内容によって利用の条件が相違するというよりも、むしろ個々の教員の諸事情による相違の方が大きいことを示していよう。また、質問方法自体にも問題があったと考えられる。したがって結果の分析は、調査によって得られた結果以外の様々な要因の混在とその影響度の高さが考えられるので、今回は割愛した。

3 考察と課題

図工・美術担当教員の実態を、小・中学校別に分析してきたが、教材研究、悩み、期待される指導者支援機関の機能のいずれも、教師の日々の授業実践に直接的に結びついている内容に対する回答率の高さが共通した傾向であることがわかった。また、その授業実践は、題材を扱う上での技法や指導法などの、授業の中での教師の活動として、極めて具体的な営みから想起されるものであった。したがって、図工・美術の担当教員は、造形に関する確かな技術と教養に裏付けされたものでなければならないという概念が、教育現場に定着しているといえよう。反面、美術教育の理念的な内容に対する回答率の低さは、前述の概念が先行するため、美術教育の将来的展望を見通してその意義を考えるとという理念的な営みの必要性が積極的に認識されえない現状を示唆していると考えられる。

しかしながら、美術教育を教育実践の場で支える教師の問題を総合的に考えた場合、そこには様々な問題の要因が重層的に存在しており、限定的、部分的な視点からの分析では把握し得ない、あるいは看過してしまう要素もあるだろう。それは、巻頭にも述べたが、学校教育の制度的な問題や、教師の教師観や人生観に深く関与するものでもあり、さらにそうした教師の観念形成が行われる教員養成の教育内容との繋がりも予想できる。今回の調査で得られた結果をもとに、別の観点で分析をすることによって、教員の研修のありかた、あるいは支援機関のありかた、さらに教員養成のありかたなど、様々な側面からの提言が可能になると考えられるが、それは機会をあらためて行うものとする。

注

- 1) 釧路芸術館構想については、1994年5月4日付け「釧路新聞」において、美術館的機能、演劇の機能、音楽の機能、指導者の研修機能を兼ね備えた北海道立の文化施設として報道されている。

付記

本研究の調査の実施に関しては、新井、佐々木の両者で行った。分析に関しては、調査内容Ⅱの「教材研究の関心と実践」、「指導上、研修上の悩みや問題点」について佐々木が行い、調査内容Ⅲの「指導者育成機関の機能」について新井が行った。全体のまとめに関しては、新井、佐々木の両者で行った。

また、本研究の調査の回答に当たり、釧路管内の小学校、中学校教諭の方々に多大な協力をいただきました。ここに感謝の意を表します。

(新井義史 本学助教授 釧路校)

(佐々木幸 本学講師 釧路校)

資料-1 調査内容(質問内容)

調査内容(質問内容)

I 教員と学校について

1 <年齢と教職経験>

現在の年齢(回答時現在)、教職経験年数、現在校勤務年数をお答えください。

2 <担当学年・時間数>

美術(図工)の担当学年と、それぞれの担当学年における美術(図工)の週当りの時間数をお答えください。

3 <美術の専攻経験>

(小学校教諭対象) 大学での美術の専攻経験はありますか。

4 <免許の有無と免許外教科>

(中学校教諭対象) 美術の免許を持っていますか。また、美術以外で現在担当している教科があれば、教科名と週当りの時間数を教えてください。

5 <雑誌、情報誌>

美術、及び美術教育の情報を、どのような雑誌、情報誌、または機関誌などで得ていますか。主なものをお答えください。 例:「教育美術」(定期購読)、「美術手帖」(時々購読)

II 図工・美術の教材研究と研修について

1 <教材研究の関心と実践>

「教材研究」や「研修」の意味するところは幅広く、様々な捉え方が考えられますが、聞き取り調査もとに(1)~(20)の内容を設定しました。

また、それぞれの内容についての関心の度合いをA~Cとして設定し、実践状況をア~オとして設定しました。

それぞれの内容について、関心の度合い、実践状況を、該当する記号に○印を付けて教えてください。

関心の度合い	A: 関心が高い、必要を感じる B: あまり意識しないが関心はある C: 関心はない、特に必要性を感じない
実践状況	ア: 積極的に平素から行っている イ: 年間を通して定期的に行っている ウ: 不定期だが必要に応じて行っている エ: 諸々の事情によってできない、行っていない オ: 必要性を感じないので行っていない

番号 教材研究および研修としての内容

- (1) 毎時の授業の計画を立て、授業の進め方を検討すること
- (2) 題材(単元)の内容を、子供の興味や能力と照らし合わせながら検討すること
- (3) 作品の作り方や描き方を研究すること
- (4) 材料の入手方法を調べたり、適切な材料を選んだりすること
- (5) 道具の使い方や、絵の具の使い方などを研究すること
- (6) 子供の絵や作品の見方、評価の方法を研究すること
- (7) 鑑賞指導の方法や資料を調べること
- (8) その学年で教えることを、適切に配列すること(系統性を意識した教材の配列)
- (9) 子供の発達段階に応じた指導内容を設定すること
- (10) 学習指導要領や指導書に示された内容をよく理解すること
- (11) コンピュータやVTR, OHPなどの新しい機器の利用法を研究すること
- (12) 美術教育の意義を研究すること
- (13) 著名な美術教育論を研究すること
- (14) 美術教育の歴史を研究すること
- (15) 他校の先生の実践を見たり、研究会などに参加して、情報交換をすること
- (16) 自分の専門的研究や実践の研究発表をすること
- (17) 教育雑誌、機関誌等によって、美術教育の情報を集めること
- (18) 自分の美術に関する教養を高めること
- (19) 自分の制作活動を進めること
- (20) 展覧会や講習会等の文化活動に参加すること

関心の度合い 実践状況

- | | |
|-----|-------|
| ABC | アイウエオ |
| ABC | アイウエオ |
| ABC | アイウエオ |
| ABC | アイウエオ |
| ABC | アイウエオ |
| ABC | アイウエオ |
| ABC | アイウエオ |
| ABC | アイウエオ |
| ABC | アイウエオ |
| ABC | アイウエオ |
| ABC | アイウエオ |
| ABC | アイウエオ |
| ABC | アイウエオ |
| ABC | アイウエオ |
| ABC | アイウエオ |
| ABC | アイウエオ |
| ABC | アイウエオ |
| ABC | アイウエオ |
| ABC | アイウエオ |

2 <指導上、研修上の悩みや問題点>

図工・美術を指導していく上で、また、教材研究や研修を進めていく上で、先生方が困っておられる、悩んでおられる内容を、聞き取り調査をもとに、(1)~(20)の内容として設定しました。

また、それぞれの内容についての共感の度合いをA~Cとして設定し、解決の現状をア~オとして設定しました。それぞれの内容について、共感の度合い、解決の現状を、該当する記号に○印を付けて教えてください。

- 共感の度合い A：共感できる、同じ状況である、
B：時々そう思うこともある、
C：共感しない、そうは思わない
- 解決の現状 ア：既に解決済みである
イ：自分で解決できる、自力で解決しようとしている
ウ：何らかの支援があれば解決できる、支援を希望している
エ：現段階では解決を保留している、解決できそうにない
オ：特に解決の必要を感じない

番号	指導上、教材研究上の悩みや問題点の内容	共感の度合い	解決の現状
(1)	題材(単元)の内容を、どう子供に教えていけばいいのかわからない。	ABC	アイウエオ
(2)	子供たちが題材に興味や関心を示さず、授業に集中しない。	ABC	アイウエオ
(3)	教科書、教科書用指導書だけでは内容や指導法が詳しくわからない。	ABC	アイウエオ
(4)	材料の種類や性質、入手方法がわからない。	ABC	アイウエオ
(5)	技術的な自信がないので、手本を示したり、手を加えてやることができない。	ABC	アイウエオ
(6)	学校の設備や備品が不十分	ABC	アイウエオ
(7)	予算や、経済的な問題から、材料、用具、資料を揃えられない。	ABC	アイウエオ
(8)	地域的な問題から、材料、用具が揃わない。	ABC	アイウエオ
(9)	こどもの作品の見方、評価のしかたがわからない。	ABC	アイウエオ
(10)	学習指導要領に提示された内容や教科書の題材配列が子供や学校の実態に即していない	ABC	アイウエオ
(11)	指導要領の改訂で、時間数が削減され、支障をきたしている。	ABC	アイウエオ
(12)	主要教科に対する周辺教科のような認識が子供や親にあるので、やりにくい。	ABC	アイウエオ
(13)	学校教育における美術・図工の果たす役割が不明確で教えるほうとしても不安だ。	ABC	アイウエオ
(14)	校務多忙で、図工・美術の教材研究等に時間をかけられない。	ABC	アイウエオ
(15)	相談できる人物や、支援してくれる機関がない。	ABC	アイウエオ
(16)	自分の専門的研究や実践の研究発表が思うようにできない。	ABC	アイウエオ
(17)	自分の美術に関する教養に自信が持てない。	ABC	アイウエオ
(18)	自分の制作活動が思うようにできない	ABC	アイウエオ
(19)	近辺に美術館などの施設がなく、展覧会などへなかなか行けない。	ABC	アイウエオ
(20)	参考資料や本の情報がなかったり、手に入れにくい。	ABC	アイウエオ

III 指導者の支援機関について

1 <研修会や研修機関>

年間を通して、種々の研究会、研修会に参加されていることと思います。さしつかえがなければ、先生が所属、又は参加している研究会、研修会名をお答えください。また、その研究会、研修会についての感想・所感をお答え下さい。(団体名を記入したくなければ、それでもかまいません。)

2 <美術鑑賞の機会>

釧路市には美術館がありません。したがって、指導者自身の鑑賞体験も様々な制約を受けますが、美術鑑賞の機会(児童生徒作品の鑑賞は除く)を次のように設定しました。(1)~(5)について、昨年度の利用回数をお答えください。

- (1) 釧路市内及び管内の画廊、ギャラリーでの鑑賞
- (2) 釧路市内及び管内の公的機関(生涯学習センター等)での鑑賞
- (3) 道立帯広美術館など、釧路管内以外での道東の美術館での鑑賞
- (4) 道立近代美術館、旭川、函館美術館など、上記以外の道内の美術館での鑑賞
- (5) 道外、国外の美術館での鑑賞

3 <指導者育成機関の機能>

釧路芸術館（仮称）は、指導者育成の機能を持つ公的機関として構想されています。この、「指導者育成」の機能について、その内容を(1)~(20)として、具体的に設定しました。

また、それぞれの内容に対して、先生方が利用しやすい条件をア~オとして設定しました。

それぞれの内容について、特に期待するものを5つ選び、それについての利用条件を、教えてください。

- 利用の条件
 (複数回答可) ア：夏・冬休みの時期に集中して利用できる
 イ：放課後、退勤後に利用できる
 ウ：土曜・日曜に利用できる
 エ：学期中に外勤・出張（研修）の形で利用できる
 オ：あまり時間的な制約がなく、希望によって即時利用できる

番号	指導者育成機関の機能の内容	利	用	の	条	件
(1)	教科書の題材（単元）に即した指導内容、指導法の講習会等	ア	イ	ウ	エ	オ
(2)	こどもの興味や意欲を喚起する題材例などの紹介の講習会等	ア	イ	ウ	エ	オ
(3)	様々な技術技法の体験的講習会等（例：絵画の技法、工芸の技法など）	ア	イ	ウ	エ	オ
(4)	様々な素材の種類や性質、その教材化などの実践的講習会等	ア	イ	ウ	エ	オ
(5)	指導法や素材、技法などについての質問に対する回答、支援	ア	イ	ウ	エ	オ
(6)	設備、備品、道具、スライド、VTRの資料の貸出、情報提供	ア	イ	ウ	エ	オ
(7)	こどもの絵や作品の見方や評価についての講習会等	ア	イ	ウ	エ	オ
(8)	鑑賞指導の方法についての講習会	ア	イ	ウ	エ	オ
(9)	種々の実践例、指導案、作例等の収集と提供	ア	イ	ウ	エ	オ
(10)	子供の特性や発達についての講演、講習会	ア	イ	ウ	エ	オ
(11)	新しい学習指導要領の内容や観点についての講習会等	ア	イ	ウ	エ	オ
(12)	コンピュータやVTR、OHPなど新しい機器の利用のための講習会等	ア	イ	ウ	エ	オ
(13)	美術教育の理念（意義や歴史など）についての講演、講習会	ア	イ	ウ	エ	オ
(14)	教育学、児童心理学、発達心理学の講演、講習会	ア	イ	ウ	エ	オ
(15)	研究会の打ち合わせ、研究サークル等の会場提供	ア	イ	ウ	エ	オ
(16)	作家や作品の見方、美学や美術史の知識を高める講演や講習会	ア	イ	ウ	エ	オ
(17)	自分の制作、研究のための場所、設備の提供	ア	イ	ウ	エ	オ
(18)	自分や所属団体の制作・研究発表の会場提供	ア	イ	ウ	エ	オ
(19)	美術作品に接することができる展示機能	ア	イ	ウ	エ	オ
(20)	雑誌、機関誌、画集等を含む図書の貸出、情報提供	ア	イ	ウ	エ	オ

資料-2 回答結果集約

I 教員と学校について

【-1 <年令と教職経験>

	平均年齢(歳)	経験年数(年)	総人数(人)	20代	30代	40代	50代	人数計
小学校	36.9	14.3	3.48	7人	10人	6人	4人	27人
中学校	37.2	15.5	3.57	10人	2人	3人	6人	21人
全体	37.0	14.8	3.52	17人	12人	9人	10人	48人

【-3 <美術の専攻経験>、【-4 <免許の有無>

	あり	なし
大学での美術の専攻経験（小学校教諭対象）	7人（26%）	20人（74%）
中学校美術免許の有無（中学校教諭対象）	12人（57%）	9人（43%）

【-4 <免許の有無と免許外教科>

美術のみ	他に1	他に2	授業なし
7人	7人	6人	1人

【-5 <雑誌・情報誌>

(単位：人)

	芸術新潮	教育美術	美術手帖	美術の教室	アトリエ	子供と美術	アート・7・リスト	梁瀬の777
中学校	4	2	1	1	1	1	1	0
小学校	2	2	1	1	0	0	0	1

II 図工・美術の教材研究と研修について

II-1 <教材研究の関心と実践>

番号	教材研究および研修としての内容		関心の度合い			実践状況					計	
			A	B	C	ア	イ	ウ	エ	オ		
(1)	毎時の授業の計画を立て、授業の進め方を検討すること	中小	18 19	3 7	0 0	4 1	6 11	10 12	1 2	0 0	21 26	人数
(2)	題材(単元)の内容を、子供の興味や能力と照らし合わせながら検討すること	中小	18 21	3 6	0 0	5 4	5 13	8 6	3 4	0 0	21 27	
(3)	作品の作り方や描き方を研究すること	中小	16 18	5 9	0 0	7 3	4 6	9 12	1 6	0 0	21 27	
(4)	材料の入手方法を調べたり、適切な材料を選んだりすること	中小	10 11	11 16	0 0	3 1	1 4	9 19	7 3	1 0	21 27	
(5)	道具の使い方や、絵の具の使い方などを研究すること	中小	12 16	7 11	1 0	4 6	1 5	11 10	4 6	0 0	20 27	
(6)	子供の絵や作品の見方、評価の方法を研究すること	中小	13 20	8 7	0 0	2 4	4 5	9 12	4 8	0 0	21 27	
(7)	鑑賞指導の方法や資料を調べること	中小	9 12	11 14	1 1	3 2	2 0	12 15	4 9	0 1	21 27	
(8)	その学年で教えることを、適切に配列すること(系統性を意識した教材の配列)	中小	11 12	8 15	2 0	2 2	4 6	11 15	4 3	0 1	21 27	
(9)	子供の発達段階に応じた指導内容を設定すること	中小	13 18	7 9	1 0	2 2	8 8	7 12	4 5	0 0	21 27	
(10)	学習指導要領や指導書に示された内容をよく理解すること	中小	3 5	16 21	2 1	1 3	5 3	10 17	4 2	1 2	21 27	
(11)	コンピューターやVTR, OHPなどの新しい機器の利用法を研究すること	中小	5 4	10 15	6 8	2 0	3 0	4 4	6 15	6 8	21 27	
(12)	美術教育の意義を研究すること	中小	9 6	8 16	4 5	1 2	4 0	9 6	4 14	3 5	21 27	
(13)	著名な美術教育論を研究すること	中小	3 1	11 11	7 15	1 0	0 0	7 4	8 12	5 11	21 27	
(14)	美術教育の歴史を研究すること	中小	4 0	11 12	6 15	0 0	0 0	7 3	8 13	6 11	21 27	
(15)	他校の先生の実践を見たり、研究会などに参加して、情報交換をすること	中小	12 18	8 9	1 0	4 3	2 7	6 13	8 4	1 0	21 27	
(16)	自分の専門的研究や実践の研究発表をすること	中小	4 4	10 14	6 8	1 2	1 1	3 10	9 9	6 4	20 26	
(17)	教育雑誌、機関誌等によって、美術教育の情報を集めること	中小	7 4	11 16	3 6	1 2	2 1	12 8	3 12	3 3	21 26	
(18)	自分の美術に対する教養を高めること	中小	12 13	7 14	2 0	6 2	3 5	8 12	3 8	1 0	21 27	
(19)	自分の制作活動を進めること	中小	8 10	8 6	5 11	2 1	2 1	5 4	9 13	3 8	21 27	
(20)	展覧会や講習会等の文化活動に参加すること	中小	10 14	8 12	3 1	6 4	2 3	6 12	4 8	3 0	21 27	
合 計		中小	197 225	171 240	50 71	59 41	59 79	163 206	98 156	39 54	418 536	

図工・美術教員の研修の現状(1)

II-2 <指導上の悩みや問題点>

番号	指導上、研究上の悩みや問題点の内容		共感の度合い			解決の現状					計	人数
			A	B	C	ア	イ	ウ	エ	オ		
(1)	題材(単元)の内容を、どう子供に教えていけばいいのかわからない	中 小	7 1	10 20	4 6	0 2	10 6	8 14	2 3	1 2	21 27	
(2)	子供たちが題材に興味や関心を示さず、授業に集中しない	中 小	2 0	10 10	9 17	2 5	8 9	3 5	1 3	7 5	21 27	
(3)	教科書、教科所用指導書だけでは内容や指導法が詳しくわからない	中 小	8 10	5 10	8 7	2 2	7 6	6 13	3 5	3 1	21 27	
(4)	材料の種類や性質、入手方法がわからない	中 小	1 2	11 19	9 6	2 2	7 8	7 13	1 2	4 2	21 27	
(5)	技術的な自信がないので、手本を示したり、手を加えてやることができない	中 小	6 5	6 13	9 9	3 1	3 8	8 13	1 2	6 3	21 27	
(6)	学校の設備や備品が不十分	中 小	9 8	10 15	2 4	2 0	2 1	10 13	3 10	4 3	21 27	
(7)	予算や、経済的な問題から、材料、用具、資料を揃えられない	中 小	7 8	12 12	2 7	1 2	1 1	10 12	5 8	4 4	21 27	
(8)	地域的な問題から、材料、用具が揃わない	中 小	5 4	6 10	9 13	0 1	4 2	5 11	2 4	9 9	20 27	
(9)	子供の作品の見方、評価の仕方がわからない	中 小	5 4	10 17	6 6	0 1	9 6	6 18	2 0	4 2	21 27	
(10)	学習指導要領で提示された内容や、教科書の題材配列が、子供や学校の実態に即していない	中 小	4 4	11 18	6 5	0 0	7 6	5 11	5 5	4 5	21 27	
(11)	指導要領の改訂で、時間数が削減され、支障をきたしている	中 小	8 0	6 12	6 15	1 1	5 2	4 9	6 4	4 11	20 27	
(12)	主要教科に対する周辺教科のような認識が、子供や親にあるので、やりにくい	中 小	3 0	10 7	7 20	1 2	6 2	5 7	3 1	5 15	20 27	
(13)	学校教育における美術・図工の果たす役割が不明確で、教えるほうとしても不安だ	中 小	3 1	10 12	8 14	1 1	6 3	5 7	5 4	4 12	21 27	
(14)	校務多忙で、図工・美術の教材研究に時間をかけられない	中 小	8 9	8 16	5 2	0 1	8 2	6 12	6 11	1 1	21 27	
(15)	相談できる人物や、支援してくれる機関がない	中 小	7 2	8 13	6 12	0 6	7 0	6 12	8 5	0 4	21 27	
(16)	自分の専門的研究や実践の研究発表が思うようにできない	中 小	4 5	4 9	13 11	0 3	5 1	2 8	1 4	13 9	21 25	
(17)	自分の美術に関する教養に自信が持てない	中 小	3 8	16 13	2 4	0 3	10 4	6 10	2 6	3 2	21 25	
(18)	自分の制作活動が思うようにできない	中 小	4 6	10 8	7 9	0 0	6 2	3 5	4 9	8 7	21 23	
(19)	近辺に美術館などの施設がなく、展覧会などへなかなか行けない	中 小	10 10	9 10	2 7	2 1	4 4	6 7	7 8	2 7	21 27	
(20)	参考資料や本の情報がなかったり、手に入りにくい	中 小	6 7	10 11	5 9	0 1	7 2	7 12	5 4	2 8	21 27	
合 計		中 小	110 94	182 255	125 183	17 35	122 75	118 212	72 98	88 112	417 532	

III 指導者の支援機関について

III-1 <研修会や研修機関> (回答のまま掲載) ()内数字は人数、数字なしは1人

中学校 釧路造形教育研究会(2)、北海道造形教育研究会、北教組教研美術部会、学教研、自主研、北海道合同教育研究会、村内授業研究会、研究所図工・美術部会、新しい絵の会
小学校 釧路造形教育研究会(2)、市教組図工美術サークル(2)、釧路市教研、新しい絵の会(2)、全道造形教育研究会、町研究所美術・図工部会

Ⅲ-2 <美術鑑賞の機会> (昨年度の平均回数) (単位:回)

	小 学 校			中 学 校			全 体		
	市内	市外	平均	市内	市外	平均	市内	市外	平均
①郷内市内・管内の画廊・ギャラリー	0.93	0.45	0.73	1.88	1.00	1.37	1.26	0.73	1.00
②郷内市内の公的機関(生涯学習センター等)	2.31	0.91	1.74	2.78	0.27	1.40	2.48	0.59	1.60
③道立帯広美術館など、①②以外の道東の美術館	1.44	0.73	1.15	1.00	0.91	0.95	1.28	0.82	1.06
④道内の美術館(③以外の道立美術館など)	0.94	0.64	0.81	1.22	0.55	0.85	1.04	0.59	0.83
⑤道外・国外の美術館	0.13	0	0.08	0.89	0.64	0.75	0.42	0.32	0.37

Ⅲ-3 <指導者育成機関の機能>

番号	指導者育成機関の機能の内容	選択者数 (人)		利用の条件					人数
				ア	イ	ウ	エ	オ	
(1)	教科書の題材(単元)に即した指導内容、指導法の講習会等	中 小	6 5	4 5	0 1	1 0	2 2	1 1	
(2)	子供の興味や意欲を喚起する題材例などの紹介の講習会等	中 小	10 15	6 9	1 3	3 2	2 6	0 1	
(3)	様々な技術技法の体験的講習会等(例:絵画の技法、工芸の技法)	中 小	10 19	6 12	2 4	1 2	3 9	1 0	
(4)	様々な素材の種類や性質、その教材化などの実践的講習会等	中 小	4 15	3 9	0 2	2 3	0 7	1 1	
(5)	指導法や素材、技法などについての質問に対する回答、支援	中 小	3 4	1 3	1 0	0 0	0 2	1 1	
(6)	設備、備品、道具、スライド、VTRの資料の貸出し、情報提供	中 小	4 5	1 0	1 1	2 0	0 1	2 3	
(7)	こどもの絵や作品の見方や評価についての講習会等	中 小	11 19	5 10	1 5	3 1	5 10	0 1	
(8)	鑑賞指導の方法についての講習会	中 小	7 7	2 3	2 2	1 1	3 4	0 1	
(9)	種々の実践例、指導案、作例等の収集と提供	中 小	8 7	3 2	2 2	1 2	4 2	1 3	
(10)	子供の特性や発達についての講演、講習会	中 小	2 8	2 2	0 3	1 1	1 3	0 1	
(11)	新しい学習指導要領の内容や観点についての講習会など	中 小	2 1	1 0	0 1	1 0	1 0	0 0	
(12)	コンピューターやVTR、OHPなどの新しい機器の利用のための講習会等	中 小	4 4	4 2	0 1	2 0	0 2	0 1	
(13)	美術教育の理念(意義や歴史など)についての講演、講習会	中 小	2 1	2 0	0 1	1 0	1 1	0 0	
(14)	教育学、児童心理学、発達心理学の講演、講習会	中 小	1 3	1 2	0 0	0 0	1 1	0 0	
(15)	研究会の打合せ、研究サークル等の会場提供	中 小	0 2	0 0	0 1	0 1	0 0	0 0	
(16)	作家や作品の見方、美学や美術史の知識を高める講演や講習会	中 小	4 1	3 0	0 0	1 1	4 0	0 0	
(17)	自分の制作、研究のための場所、設備の提供	中 小	3 3	1 1	0 1	1 0	0 0	2 2	
(18)	自分や所属団体の制作・研究発表の会場提供	中 小	2 0	1 0	0 0	1 0	0 0	1 0	
(19)	美術作品に接することができる展示機能	中 小	3 4	1 0	1 2	1 1	0 0	1 1	
(20)	雑誌、機関誌、画集等を含む図書への貸出し、情報提供	中 小	6 1	2 0	4 1	1 1	0 0	2 0	

(利用の条件は複数回答可)